

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）

研究期間：2015～2019

課題番号：15KT0132

研究課題名（和文）凍結された紛争：その予防と積極的平和の模索

研究課題名（英文）The Frozen Conflicts: Seeking the Prevention and Active Peace

研究代表者

廣瀬 陽子（HIROSE, Yoko）

慶應義塾大学・総合政策学部（藤沢）・教授

研究者番号：30348841

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「凍結された紛争」の誕生・存続のメカニズムを明らかにし、その発生の予防、解決可能性を検討することを目的とし、文献研究、現地調査などによって進められた。

研究を通じ、凍結された紛争の解決に影を落とす歴史背景および歴史認識問題の深刻さが浮き彫りになった。また、大国の外交戦略の影響も重要である。例えば、旧ソ連圏の凍結された紛争は、ロシアのグランド・ストラテジーの中で固定化された現実があり、また、凍結された紛争の多くに冷戦構造や現在の「東西対立」の構造などが見られる。最後に、凍結された紛争が紛争当事国ならびに関係国の内政・外交に、ひいては国際政治に重層的な影響を与えることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「凍結された紛争」は、熱戦でないことから国際社会の注目や優先順位も低くなりがちであるが、多くの国の内政・外交に影響を与えるものであり、解決が困難であるにもかかわらず、その対策は急務である。最善の対策を考えるためには、「凍結された紛争」の実情を包括的に検討し、政策立案に繋げてゆく必要がある。そのため、より多くの地域の「凍結された紛争」を包括的に捉え、その発生や状況の固定化の経緯、問題の所在などをより一般化して明示し、またその研究成果を一般の方々や政策担当者にお伝えすることは、世界の本質的な平和を実現するために、極めて大きな学術的意義、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）： This study examined how "frozen conflicts" begin and continue, considered strategies for preventing their occurrence, and investigated the feasibility of implementing those strategies.

The research found that failure to recognize the importance of the historical backgrounds of frozen conflicts is a major factor in preventing their resolution. The diplomatic strategies of major powers have important impacts, as well. For example, frozen conflicts originating in the former Soviet Union have been resolved by Russia's Grand Strategy; similarly, many frozen conflicts in the world began during either the Cold War or the subsequent East-West confrontation structure. Frozen conflicts have multilayered effects on both the internal and foreign affairs of the parties involved. These effects extend to nearby countries, and thus to international politics.

研究分野：旧ソ連地域の地域研究を、特に紛争や国際関係に注目しながら、国際政治学と融合させて研究を行っている。

キーワード：凍結された紛争 未承認国家 分断国家 東西対立 勢力圏 ハイブリッド戦争 歴史認識 代理戦争

1. 研究開始当初の背景

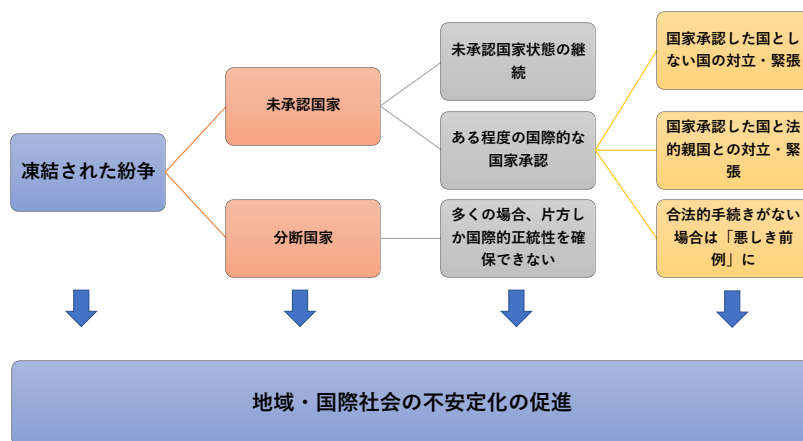
本研究助成を申請した2014年は、ロシアがウクライナのクリミアを併合し、ウクライナ東部で内戦が勃発し、それにロシアが介入をし始めた、いわゆる「ウクライナ危機」が深刻化した年であったが、以前より、未承認国家(後述)の研究を進めていた研究代表者は、ウクライナ危機の長期化を予想した。何故なら、ロシアが旧ソ連諸国の分離主義に関する紛争に関与した場合、そのほとんどが「未承認国家」化し、停戦状況が固定化してきたからだ。クリミア併合は、直接的な武力衝突は起こらなかったと言って良いが、ロシア軍が展開され、軍事的脅威の中で達成されたものであり、クリミア併合が国際的に承認されていない中、ロシアとウクライナの間の「凍結された紛争(Frozen conflict)」が続いていることは間違いない。また、ウクライナ東部の紛争は、ウクライナから分離を達成しようとして独立を宣言したドネツクおよびルガンスクとウクライナ政府軍との間に勃発した紛争であるが、ロシアが分離主義派を支援し、紛争は一応の停戦状態にあるものの、いまだ膠着している状態だ。つまり、2014年に勃発した紛争が2020年現在においても、停戦を迎えながらも未解決である現実は、凍結された紛争になりつつあると言って良いだろう。また、当時は、2010年から12年かけて、アラブ世界で次々に広がった「アラブの春」に端を発する内戦などが燦る時期でもあった。特にシリアを中心に世界を震撼させていたイスラーム国(ISIS)の活動のピークも2014年であった。このように、研究を開始した当初は、まさに新しい凍結された紛争が多く生まれそうな時期であった。

「凍結された紛争」とは、国家間の戦争や地域紛争、内戦などが、武力を用いた戦いを経て、停戦合意などによって武力衝突は基本的になくなっていくものの、紛争の原因となった問題そのものは解決されていないため、停戦状態が固定化されている紛争のことを意味する。そして、

「凍結された紛争」は「未承認国家(非承認国家とも言うが、本研究では未承認国家で統一)」や「分断国家」に直結する。実際、「凍結された紛争」そのものの先行研究はほとんどなく、同キーワードで既存文献を検索すると、ヒットするのはほとんど全て「未承認国家」に関する著書か論文である。このことから、「凍結された紛争」が未承認国家と不可分であることは間違いないが、「未承認国家」の研究も決して十分になされてきたわけではない。未承認国家とは、「国家」の基準を定めたモンテヴィデオ議定書の国家の要件に照らせば、三つの条件、すなわち、領域、恒久的人民、政府を備え、自らは外交能力もあると考え、諸外国に国家承認を求めものの、承認を受けていない「国家」であり、国際法的な主権国家にはあたらないものだといえる。研究代表者は長年、科学研究費の助成も受けながら、欧州境界の未承認国家の比較研究を行なってきて(若手研究(B)「ポストウェストファリア体制の国家像の模索:欧州境界の未承認国家の比較研究から」(2012~15年度))、2014年8月に『未承認国家と覇権なき世界』(NHK出版)を出版したことで、未承認国家研究の一つの区切りをつけることはできたが、その後も、科学研究費の助成を受けながら当該研究を続けた(国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)「ポストウェストファリア体制の国家像の模索:欧州境界の未承認国家の比較研究から」(2016-18年度))。そして、未承認国家の研究において最も大きな壁となっているのが「凍結された紛争」である。上述のように「凍結された紛争」についての先行研究は、未承認国家との絡み以外ではないと言って良いが、「凍結された紛争」こそが未承認国家の源となっていることには余り注目されてこなかった。「凍結された紛争」は、未承認国家のみならず、中国・台湾や韓国・北朝鮮の間に見られるような「分断国家」という現象にも直結している。「分断国家」の場合も、未承認国家よりは国際的に地位を確立している場合が多いが、第三国が分断国家の両方を国家承認することが困難であることから、分断国家と未承認国家関係も極めて類似の現象だといえる。

未承認国家は無法地帯であり、地域や世界の深刻な不安定要因になることから、本来は解決されるべきであるのに、国際法の矛盾もあり、なかなか解決されずに現在に至る。研究代表者は、これまでの研究において、未承認国家の将来的なシナリオをいくつか提示したが、それらのほとんどはネガティブなもので、かつ関係者の合意は事実上想定しがたいのが現実だ。図1で示すように、「凍結された紛争」は世界の不安定化の源泉ともいえ、悪循環をもたらしている。

図1 世界の不安定化の源泉となる凍結された紛争

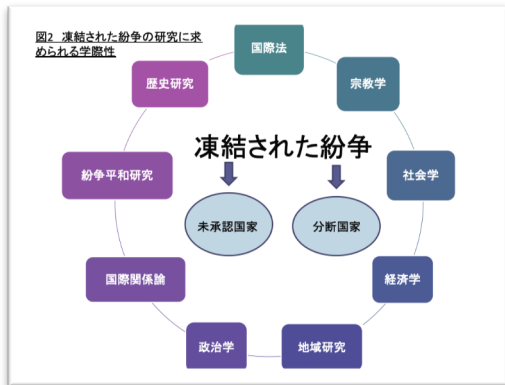


「凍結された紛争」は世界の不安定化の源泉ともいえ、悪循環をもたらしている。

そこで、そもそも未承認国家や分断国家を生まさない、存続させない状況、すなわち「凍結された紛争」を予防する、解決するというアプローチが不可欠だと考えた次第である。

2. 研究の目的

本研究は、「凍結された紛争 (Frozen conflict)」の誕生・存続のメカニズムを明らかにし、その発生をいかに予防できるか、また、解決できるかを検討することを目的とした。そのため、まず現在進行形で進んでいるウクライナ東部の情勢を詳細に分析し、「凍結された紛争」に変化していく場合はその過程を、予防できた場合はその政策を分析し、他の「凍結された紛争」との比較研究により、「凍結された紛争」が生まれ、長期化するメカニズムを明らかにし、その予防・解決のための政策提言を行なうことを目指した。



本研究の最大の特徴は、その学際性である。

図2で示すように、「凍結された紛争」は極めて多くの分野にまたがる問題であり、多面的なアプローチが求められる。研究代表者は従来、国際関係論、政治学、地域研究 (旧ソ連・黒海地域)、紛争平和研究、歴史研究、社会学を総動員して研究を行なってきたが、そのような学際的なアプローチが未承認国家の研究をしている際にも必要となり、国際法と宗教学の研究にも力を入れてきた。経済学についても研究での協力や教示を依頼し、自分が対応できない領域については、他の研究者のサポートも得ながら「凍結された紛争」に関係する問題に対しても、多面的・多層的なアプローチを行なってきた。そして、それは大きな特色

であると考えられる。また、「凍結された紛争」は先行研究がない分野であり、その問題をメインに扱うことそれ自体が極めて独創的だと考えている。前述のように、本研究を始めた当時、ウクライナ東部の混乱が、そのまま「凍結された紛争」ひいては「未承認国家」となるのではないかという危惧が国際的に強く持たれていたが、それを予防するための処方箋については全く問われていなかったのが実情だ。実際、問題勃発から6年が経ち、ウクライナ東部2州の一部は「未承認国家」化してしまった現実を鑑みても、本研究の持つ意味は極めて大きいと思われるのである。

本研究はウクライナ東部の未承認国家化を防ぐことには貢献できなかったが、「凍結された紛争」のメカニズムを研究するのみならず、それを防止しうる政策を導き出すことを目的としてきたため、その研究成果はウクライナ東部の問題のみならず、世界の不安定要因である世界中の未承認国家や分断国家に対するより良い政策やそのような主体が今後増えないようにするための予防策を提示できると確信する。その成果は、学術領域においても、国際機関などの実務家にとっても大きな意義を持つはずだ。

3. 研究の方法

本研究は、「凍結された紛争」の誕生・存続のメカニズムを明らかにし、その発生をいかに予防できるか、また、解決できるかを示すために、学際性を重視しながら、文献調査と現地調査を主軸として進めつつ、適宜、国内外で研究成果を発表し、そのレスポンスに対応しながら、随時、研究の方向性を再検討し、柔軟に最善の方法をとってゆくというスタイルで進めた。また、研究開始当初は研究対象として想定していなかったが、ロシアがウクライナに展開した手法として注目された正規戦・非正規戦を組み合わせた軍事戦略である「ハイブリッド戦争」が、近年の凍結された紛争に多用されていることから、ハイブリッド戦争に関する研究も深めた。

文献調査は、既刊の論文、書籍等の先行研究を再度検討し、新刊のものも全て入手すると共に、インターネットを活用して、海外の新聞や通信社の情報などにも常にアクセスして良い情報を吟味し、それらを的確な形で分析することによって行なった。

現地調査は、いくつかの代表的な事例を抽出して行なった。本研究資金に限界があるため、他研究資金なども用いての現地調査となったが、かなり充実した調査を行うことができた。現地調査では、当地での資料収集、政策担当者や研究者、ジャーナリストなどへのインタビューやディスカッション、現地住民などへのインタビュー、重要拠点の視察などを行なった。本研究に関連する海外 (一部日本の主権下にある領土を含む) での調査は表1のとおりである。表1の【】には、調査に用いた資金や訪問スキームを記した。

(1) 凍結された紛争を解決する上で役立つような先行事例：

- ・ オーランド諸島：スウェーデン系が居住する諸島であり、フィンランドとスウェーデンの間で領有権が争われたが、フィンランド領内での広範な自治を得る形で平和的に共存～フィンランドで調査。
- ・ ベトナム：南北で争い、米仏と戦争をしたが、戦争終結後に国家統一し、諸外国とも基本的に平和共存～ベトナムで調査。

(2) 民族の平和的共存の先行事例：

- ・ サミー人：スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、ロシアなどに分布する民族で、歴史的には様々な問題があったが、現在は各国家と基本的に平和共存～ノルウェーとフィンランドで調査。

(3) 分断国家の統一事例：

- ・ ドイツ：東西ドイツの統一とその後の統合プロセス～ドイツで調査。

- (4) 領土問題の平和的解決の先行事例：
- ・ バレンツ海：ロシアとノルウェーが約 17 万 5000 平方キロの係争海域を 2 等分する方法で 2010 年に平和的解決～ロシアとノルウェーで調査。
- (5) 未解決の凍結された紛争：
- ・ 旧ソ連の凍結された紛争(事例として、アブハジア、南オセチア、ナゴルノ・カラバフ、沿ドニエストル、ウクライナ東部)：南オセチア、ナゴルノカラバフなどが熱戦化したこともあり、ロシアの介入可能性のゆえに、常に緊張している～ロシアで調査。
 - ・ 台湾：中華人民共和国と台湾の分断。熱戦が起こることは想定しづらいが、様々なレベルで緊張関係が見られる～台湾で調査。
 - ・ 朝鮮半島：韓国と北朝鮮の分断。にわかに熱戦が起こるとは想定しづらいが、北朝鮮が様々な軍事的挑発を行っていることもあり、緊張感は常に残存～韓国で調査。
 - ・ ハンス島を巡る国境紛争：デンマーク領グリーンランドとカナダ領エルスミア島の間が両国の国境となっているが、その間のハンス島(無人島)等については合意ができず、双方の示威行為が続いていたが、2005年に冷静に交渉を行うことで合意～デンマークで調査。
 - ・ 北方領土：北方領土をロシアが実効支配しているが、日本が返還要求～ロシア、北方領土、日本で調査。
- (6) 潜在的な紛争の事例：
- ・ 中央アジア水紛争：中央アジアでは水が豊富ながら資源を欠くキルギス・タジキスタン、資源はあるが水が不足するウズベキスタンとの間でいわゆる「水紛争」があったが、ウズベキスタンの体制転換以後、状況が改善しつつある～ウズベキスタンで調査。
 - ・ フェルガナ盆地周辺の民族問題：フェルガナ盆地はウズベキスタン、キルギス、タジキスタンの 3 カ国に広がる地域で、多民族地帯である。ソ連末期から多くの民族対立や混乱が見られた地域であり、2010年のキルギスでの政変では同国のオシュから逃れたウズベク難民が集結するなど、様々な形で不安定化しやすい地である～ウズベキスタンで調査。
- (7) 凍結された紛争の固定化に利用されやすいハイブリッド戦争の事例：
- ・ ロシアによるクリミア併合：ハイブリッド戦争により、ロシア・ウクライナ間の凍結された紛争となった～ロシアおよびハイブリッド戦争の関連センターがあるフィンランド[ハイブリッド脅威対策センター(European Centre of Excellence for Countering Hybrid Threats)]、エストニア[NATO サイバー防衛協力センター(NATO Cooperative Cyber Defence Centre of Excellence)]で調査。
 - ・ ハイブリッド戦争一般～フィンランド、エストニア、ロシアで調査。
- (8) 紛争解決の仲介・スキームの事例：
- ・ OSCE ミンスクグループ：ナゴルノ・カラバフの和平の仲介を行っており、米露仏が共同議長～ロシア、フランスで調査。
 - ・ ロシア・ジョージア紛争の停戦：EU 理事会議長・仏大統領(当時)のニコラ・サルコジの提案した 6 項目からなる和平案に基づく停戦～フランス、ロシアで調査。
 - ・ 「ミンスク 2」：ウクライナ東部の紛争の停戦協定で、遵守されなかったが、独仏首脳が主導し、独仏露宇 4 カ国の首脳が締結～ドイツ、フランスで調査。

表1 海外調査

年度	現地調査【資金・スキーム】
2015	ロシア(モスクワ・クリミア半島)【本科学研究費、および、科学研究費・基盤研究(B)「ウクライナ動乱の総合的研究」】 フィンランド【科学研究費・若手研究(B)「ポストウェストファリア体制の国家像の模索：欧州辺境の未承認国家の比較研究から」】
2016	ノルウェー【本科学研究費】 フィンランド【科学研究費・国際共同研究加速基金】
2017	フィンランド【科学研究費・国際共同研究加速基金】 ※2017年度はフィンランドで在外研究 ロシア(サンクトペテルブルグ)【科学研究費・国際共同研究加速基金】 エストニア【科学研究費・国際共同研究加速基金】 ドイツ【科学研究費・国際共同研究加速基金】 フランス【科学研究費・国際共同研究加速基金】 デンマーク【科学研究費・国際共同研究加速基金】 ノルウェー【科学研究費・国際共同研究加速基金】
2018	ウズベキスタン【本科学研究費】 北方領土(国後島、色丹島)【独立行政法人北方領土問題対策協会による北方四島交流事業】 ロシア(ウラジオストク、ハバロフスク、サハリン)【慶應義塾大学・学術交流支援資金】 ベトナム【科学研究費・国際共同研究加速基金】
2019	エストニア【本科学研究費】 ロシア(モスクワ)【慶應義塾大学・学事振興資金】 フィンランド【本科学研究費】 台湾【本科学研究費】 韓国【本科学研究費】

なお、当初の研究計画で予定していた東ティモールと南スーダンでの調査は、予算と時間の制約、安全性確保の問題により、取りやめた。

4. 研究成果

「未承認国家」の研究と相互補完的に進めてきた5年にわたる本研究の成果は大変大きく、国際社会のより「積極的な平和」を達成するためには、凍結された紛争および未承認国家問題の解決がいかに大事かということを変更して認識させられた。

凍結された紛争の解決はとても困難である。

第一に、概して紛争には**ナショナリズム**が絡み、紛争のプロセスで多くの犠牲が出るため、**余程満足のゆく条件**が提示されなければ和平に合意できないという点がある。

第二に、凍結された紛争の存在が国内政治や国際政治に利用されているという面があり、そうなると紛争当事国や周辺国が紛争の固定化を望み、実質的な和平への動きが進まない傾向が出てくる。特に、**大国が絡み、代理戦争**のような状況となっている紛争はより解決が困難となっていると言えるだろう。

第三に、凍結された状況が長ければ長いほど、**問題解決後の「新しい現実」への対応が困難**になるという問題がある。例えば、政治経済的に恵まれた西独と東独の統一ですら、統一後には多くの困難があり、統一から約30年経つ現在でもなお、東西格差や意識の違いなどが顕在化しており、統一の難しさを露呈しており、そうなると例えば北朝鮮と韓国の一統のハードルがいかに高いのかは容易に想像できることである。

第四に、近年、ロシアが**ハイブリッド戦争**という戦略を多用するようになり、それによりロシアは安価かつ国際的批判を避けながら凍結された紛争の維持をより容易にできるようになっているということがある。

第五に、凍結された紛争の多く、特にアジアの事例では、**歴史認識問題**がかなり根深く絡んでおり、それが紛争当事者国間で相互に譲れない状況となっていることもまた、問題解決を難しくしている要因となっている。

他方、紛争の平和的解決や民族共存などの先行事例を検討すると、それらの経験を現在の凍結された紛争に容易に適用することができないこともよく分かる。例えば、それらの多くの事例が北欧などの高度に民主化・自由化が進んだ国に見られる一方、凍結された紛争を抱える国の多くが非民主的な政体を維持していることから、システムや経験を安易にそれらの国に適用することは非現実的であると考えられる。また、ベトナムの事例などは、戦争が国際化していたため、統合に国際的な支援があったことや戦争の痛みのあまりの大きさから統合に強いインセンティブが生まれたということもあり、やはり多くのケースに適用できる先行事例とは考えにくい。

凍結された紛争は、紛争当事国がある一定以上の相互の信頼関係を持ち、冷静に外交交渉を行える場合では、喫緊の不安定材料にはならないと言え、双方に納得がゆく形の解決を模索することが可能であろう。

だが、紛争当事国が非民主的であったり、紛争当事国間で信頼醸成が進まなかったりする場合、凍結された紛争は容易に「熱戦化」しうる。ただし、「熱戦化」は紛争当事国間の関係悪化によるものだけではなく、紛争当事国の片方、ないし双方の内政や外交の戦略によっても生じうる。例えば、2008年に凍結された紛争であった南オセチア紛争が、ロシア・ジョージア戦争に発展した背景としては、国内政治が不安定化していたジョージアが自国を一つにまとめた意図やソチ五輪（ジョージアの未承認国家であるアブハジアの更なるロシア化に影響すると考えられた）を中止にさせるべくロシアの国際的立場を貶める目的を持っていた一方、ロシアはジョージア（とウクライナ）のNATO加盟を阻止し、親ロシア的な「近い外国」と言われる旧ソ連諸国に対しても見せしめをするという目的があった。また、2016年4月のナゴルノ・カラバフ紛争の4日間の再燃は、明らかにアゼルバイジャンが石油価格下落などで経済状況が悪化していた中で、自国民のナショナリズムを鼓舞する目的があったと言える。特に、アゼルバイジャンの場合、堅固な権威主義を維持するため、国民の不満を「敵」、すなわちナゴルノ・カラバフ紛争で争うアルメニアに振り向けるという装置を維持する必要があるため、紛争解決を目指す態度はあくまでもポーズで紛争の固定化を望んでいるという状況すらあるのである。加えて、アルメニア側も和平となれば、武力によって獲得したナゴルノ・カラバフがアルメニア人勢力の支配下に温存できなくなる可能性が高くなるため、現状維持を望んでいるとも言われている。

凍結された紛争が熱戦化した場合、その国際的な影響は、グローバル化が進む中で特に顕著になっており、熱戦化を防ぐことはもちろん、凍結された紛争そのものを根本的に解決することは急務だと言えるのだ。

凍結された紛争の解決が難しい背景には、一見局地的な対立に見える凍結された紛争が、実は大国政治の中に組み込まれているケースが多く、特に冷戦期に勃発した紛争やロシアが絡む紛争の多くがその事例に相当する。その場合、解決は極めて困難となる。

このように、**凍結された紛争は解決が困難でありながら、世界にとって大きな脅威**であり、解決のスキームを確立することは急務である。本研究を続けながら、書籍や論文、国内外での学会発表などで研究成果を発表する一方、OECE ミンスクグループの共同議長に提言を行ったり、日本の政府関係者、外務大臣にご意見を申し上げたりし、研究を実務の場所に活かしていただく努力もしてきた。**研究と実務を連携**させる形で、本研究が世界の真の平和に結実することを希望しつつ、本研究を今後も継続してゆく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計33件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 Vol.01
2. 論文標題 南コーカサスと「狭間の政治学」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JFIR World Review	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 10月号
2. 論文標題 「ロシア化」強まる北方領土 経済協力で局面を打開できるか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ウェッジ	6. 最初と最後の頁 38-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 10月号
2. 論文標題 中露関係の深層	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日中経協ジャーナル	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hirose Yoko, Keio University, Japan	4. 巻 6
2. 論文標題 INTERNATIONAL COOPERATION IN THE ARCTIC REGION: THE SEARCH AND RESCUE AND THE BARENTS COOPERATION	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 EURASIAN JOURNAL OF SOCIAL SCIENCES	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15604/ejss.2018.06.04.003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 89
2. 論文標題 2018年のアルメニア政変とその余波	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際情勢	6. 最初と最後の頁 83-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hirose Yoko	4. 巻 April 23
2. 論文標題 Ambivalent China-Russia Relations in Eurasia	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 GFJ Commentary	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 25: 4
2. 論文標題 ロシアによるハイブリッド攻撃の脅威	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 治安フォーラム	6. 最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 4月号
2. 論文標題 ロシアを取り巻く「内憂外患」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊 経団連	6. 最初と最後の頁 32-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hirose Yoko	4. 巻 3
2. 論文標題 Russian Aims and Prospects for its North Korea Policy	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Aleksanteri Insight	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hirose Yoko	4. 巻 12 February
2. 論文標題 Japan 's Northern Territories v Russia 's Kuril Islands: Can the two overcome their differences and establish a peace treaty?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 APPS Policy Forum	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoko HIROSE	4. 巻 5 (2)
2. 論文標題 Recent Views in Japan Concerning Sino-Russian Relations	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The ASAN FORUM	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 86
2. 論文標題 旧ソヴィエト連邦共和国とロシア：関係はどう規定されるのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神奈川大学評論	6. 最初と最後の頁 101-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 5,6
2. 論文標題 「離婚なき便宜的結婚」：中口関係の現状と今後の展望	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 世界経済評論	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko HIROSE	4. 巻 5 (6)
2. 論文標題 Russia 's North Korea Policy: The Logic and Dilemma of Assisting North Korea	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The ASAN FORUM,	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 667
2. 論文標題 ウクライナ危機の長い影：ロシアとNATO	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際問題	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoko HIROSE	4. 巻 -
2. 論文標題 Japan-Russia Relations: Can the Northern Territories Issue be Overcome?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CSIS[Center for Strategic and International Studies] Strategic Japan Working Papers	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoko HIROSE	4. 巻 4
2. 論文標題 The Complexity of Nationalism in Azerbaijan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 International Journal of Social Science Studies	6. 最初と最後の頁 136-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.11114/ijsss.v4i5.1531	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 -
2. 論文標題 北方領土問題の解決を目指して エストニアとロシアの国境交渉からの示唆	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 北方領土問題対策協会『平成27年度 調査研究レポート・報告書』	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 84
2. 論文標題 帝国の落とし子、未承認国家	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 アステイオン	6. 最初と最後の頁 67-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/1778100	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 1,2
2. 論文標題 中露の狭間で揺れる中央アジア経済政策	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 世界経済評論	6. 最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 12
2. 論文標題 英国EU脱退の旧ソ連諸国への影響	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 海外事情	6. 最初と最後の頁 95-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 1
2. 論文標題 アゼルバイジャン：独立25年間の歩み	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ロシアNIS調査月報 特集 ソ連解体から四半世紀を経たロシア・NIS	6. 最初と最後の頁 50-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 87
2. 論文標題 ロシアにとってのシリアとチェチェン：シリア紛争は第三次チェチェン紛争か	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際情勢	6. 最初と最後の頁 95-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko HIROSE	4. 巻 5
2. 論文標題 Recent Views in Japan Concerning Sino-Russian Relations	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The ASAN FORUM	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 86
2. 論文標題 旧ソヴィエト連邦共和国とロシア：関係はどう規定されるのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神奈川大学評論	6. 最初と最後の頁 101-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 5,6
2. 論文標題 「離婚なき便宜的結婚」：中口関係の現状と今後の展望	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 世界経済評論	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko HIROSE	4. 巻 6-1
2. 論文標題 Unrecognized States in the Former USSR and Kosovo: A Focus on Standing Armies	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Open Journal of Political Science	6. 最初と最後の頁 67-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 86
2. 論文標題 北極圏をめぐる近年のロシアの動き：中国の動向に注目して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『国際情勢』	6. 最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko HIROSE	4. 巻 4-5
2. 論文標題 The Complexity of Nationalism in Azerbaijan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 International Journal of Social Science Studies	6. 最初と最後の頁 136-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 巻 85
2. 論文標題 ロシアのハイブリッド戦争に関する一考察	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『国際情勢』	6. 最初と最後の頁 95-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 21
2. 論文標題 世界地図は一つではない：暫定国境と未承認国家	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 kotoba	6. 最初と最後の頁 90-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 90
2. 論文標題 中国「一带一路」の影響：キルギスの事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国際情勢』	6. 最初と最後の頁 101-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 巻 92
2. 論文標題 南コーカサスにおける非民主的な「安定」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アステイオン	6. 最初と最後の頁 58-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/1778100	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 廣瀬 陽子
2. 発表標題 ユーラシアをめぐる中露関係
3. 学会等名 比較経済体制学会第58回全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Russia-Japan Relations: Focusing on the Northern Territories Issue
3. 学会等名 18th Aleksanteri Conference "Liberation-Freedom-Democracy? 1918-1968-2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Possibility of Japan-Russia Cooperation
3. 学会等名 Japan-Russia Dialgue: Possibility of Japan-Russian Cooperation in an Increasingly Complex Northeast Asia (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Collaboration between Europe and Asia - Japanese perspective
3. 学会等名 International Seminar “Connectivity Between Europe and Asia - Japanese Perspective” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Russian policy for the Unrecognized States after the Ukrainian Crisis: focusing on the Transnistrian problem
3. 学会等名 IOS Writer's Workshop “Post-Soviet Conflict Dynamics and Changing Discourses” (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Russian Policy for the Unrecognized States After the Ukrainian Crisis
3. 学会等名 International Seminar - DIALOGUE BETWEEN JAPAN AND FINLAND ON RUSSIAN POLITICS AND ECONOMY (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Effects of Ukrainian Crisis on Transnistria: Focusing on the security problem
3. 学会等名 17th Aleksanteri Conference “Russia ’ s Choices for 2030 ” (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Russian policy for Post-Soviet unrecognized states and regions: Similarities and Differences
3. 学会等名 Aleksanteri Institute, Visiting Fellows research seminar
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Japan-Russia Relations: Can the Northern Territories Issue be Overcome?
3. 学会等名 CSIS Workshop (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 廣瀬陽子
2. 発表標題 未承認国家の誕生と存続：帝国・連邦の遺産
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 International cooperation in the Arctic region following the Ukrainian Crisis: The Search and Rescue and the Barents cooperation
3. 学会等名 THE NEW FORMS OF ADVANCED ECONOMIC COOPERATION IN EURASIA AND ASIA PACIFIC REGION AND ITS IMPLICATIONS FOR THE DEVELOPMENT OF RUSSIA ' S SIBERIA AND FAR EAST (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 International Cooperation in the Arctic Region Following the Ukrainian Crisis: Focusing on the Search and Rescue, the Barents Cooperation, and the Possible Japanese Support
3. 学会等名 NORASIA VII: MARITIME ASIA (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Russian Development Policy for Russian Far East
3. 学会等名 Third Policy Dialogue on International Cooperation in the Development of Russia 's Siberia and Far East (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Complexity of Nationalism in Azerbaijan
3. 学会等名 ICCEES (the International Council for Central and East European Studies) ICCEES IX World Congress 2015 (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Yoko HIROSE
2. 発表標題 Russian Hybrid Warfare: Focusing on Its Change in Characteristics and Effects for the Former USSR
3. 学会等名 19th Aleksanteri Conference " TECHNOLOGY, CULTURE, AND SOCIETY IN THE EURASIAN SPACE " (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬 陽子
2. 発表標題 狭間の国家としてのジョージアの歴史背景と政治情勢
3. 学会等名 ソ連末期の混乱からソ連邦解体まで
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 廣瀬 陽子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 ロシアと中国：反米の戦略	

1. 著者名 廣瀬陽子（編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 432
3. 書名 アゼルバイジャンを知るための67章	

1. 著者名 廣瀬陽子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 群像社	5. 総ページ数 109
3. 書名 アゼルバイジャンー文明の十字路で躍動する「火の国」	

1. 著者名 六鹿茂夫、廣瀬陽子、他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 408 (215-244; 272-293)
3. 書名 黒海地域の国際関係	

1. 著者名 石川幸一、馬田啓一、渡邊頼純、廣瀬陽子、他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 300 (148-161)
3. 書名 メガFTAと世界経済秩序：ポストTPPの課題	

1. 著者名 下斗米伸夫、廣瀬陽子、他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 400 (346-352)
3. 書名 ロシアの歴史を知るための50章 (エリア・スタディーズ152)	

1. 著者名 遊川和郎、廣瀬陽子、鈴木久志、鈴木有理佳、松田康博	4. 発行年 2016年
2. 出版社 亜細亜大学アジア研究所	5. 総ページ数 192 (91 - 132)
3. 書名 中国との距離に悩む周縁	

1. 著者名 北岡伸一、細谷雄一、廣瀬陽子、他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 424 (256-306)
3. 書名 新しい地政学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Visiting Researchers - Yoko Hirose http://www.helsinki.fi/aleksanteri/english/fellowship/Hirose.html</p> <p>AI Visiting Fellows Research Seminar http://www.helsinki.fi/aleksanteri/english/news/events/2017/hirose.pdf</p> <p>解体 ロシア外交 http://wedge.ismedia.jp/category/russia</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----